

新訂 チベットの死者の書 1994年 講談社

おおえ まさのり

京都学芸大学特修美術学科卒業。1965~69年、精神世界・ニューエイジ思想に触れ、71年から80年にかけてインド、ネパール、ラダック、バリなどでフィールドワークをする。チベット仏教の翻訳、紹介に努める一方、精神世界・ニューエイジ思想に関する著述、映画(『ヘッド・ゲーム』『サロメズ・チャイルド』『リンガラジャ』)、ワークショップ、ギャザリングなどの企画開催に携わる。現在、ガイア・ファウンデーション主幹。

バルドウ・トエ・ドル考

チベットへの道

チベットに仏教がもたらされたのは8世紀の頃といわれ、我国に仏教が伝來したのとほぼ時を同じくしている。7世紀から8世紀にかけてのインドでは、紀元前5世紀の頃に初めて明らかにされた目覚めたもの(ブッダ)の教え「仏教」が、小乗から大乗そして金剛大乗(あるいは真言密乗とも呼ばれる)へと発展してきた。

そして8世紀の初頭、瞑想と精神的体験にひいでた仏教のヨーギ・尊師パドマ・サムバーヴァは、チベットに初めて仏教(金剛大乗)を伝えた。チベット古来のボン教の影響を受けながらチベット仏教は、その後素晴らしい発展をとげていった。

パドマ・サムバーヴァの伝えたヨーガ行派(紅帽派、古派)に対して、のちに論争と哲学を重んじる中觀派(黄帽派)が新しく台頭してくる。そしてチベットは、ラマを国首とする仏教王国を形成してゆくことになる。以来1960年に至るまで鎖国状態にあったチベットは、秘密のヴェールにおおわれてきた。

近年、その歴史が明るみに出されるに従い、チベットは、「西藏 大藏經」を初めとして、最も素晴らしい仏教経典の宝庫となってきた。仏教発祥の地インドでは、12世紀を最後に仏教が全く姿を消してしまったために、サンスクリット原典のほとんどは散逸し消失してしまった。しかし幸いなことに私たちは今日、チベット仏教経典の中にそれらを見る能够である。何故なら、仏教伝来の当時文字を持たなかつたチベット人たちは、サンスクリット文字を借用しながら訳出に当つたのである。それはチベット訳仏典をサンスクリット原典に最も近い仏教経典として後世に伝えることとなった。そのため私たちは現在、チベット仏教の中に仏教(金剛大乗仏教)の最も正統的、最も精髄的な教えの姿を見ることができる。

チベット仏教は、後に西洋人によってラマ教と呼ばれるようになり、それが俗称となっている。なおこの金剛大乗仏教は、我国には9世紀の初頭に唐の国から、弘法大師空海、伝教大師最澄らによつてもたらされ、密教(秘密仏教)として知られているものである。

ヨーガ

チベット金剛大乗仏教の特徴は、ヨーガ・タントラといわれる人間宇宙論に基づいているということである。そのためチベット仏教は「タントラヤーナ」あるいは「アヌタラ・ヨーガ・タントラ乗」とも呼ばれる。

ヨーガは、高いものへ低いものを導かせるような方法で、低い人間の性質をより高い、あるいは神の性質へ加えることである。私たちには、真の存在の本性の認識を妨げる無知という精神的な暗黒の状態が存在する。人々を惑わせるこれらの誤った概念が全てにわたって抑制され、心がこれらの考え方や無知から生じてくる思考の過程を全く欠いて、原初的な何ものにも飾られていない心の状態が実現される時、クリヤー・ライト(眩しく輝く透けた発光)とよばれる啓発がしだいに明らかになってくる。それは厚いごみでおおわれた鏡、あるいは泥水で満たされた水晶の器にたとえられる。ヨーガは鏡からごみを、水から土の粒子を取り除く科学的な身体技法である。心がこのように透明で清くされる時にのみ、それは存在の本性の光を映すことができ、私たちは私たち自身を知ることができるようになる。幻影は、私たちから真の存在の本性を包み隠すヴェールである。化学の方法によって、金が不純物から分けられるように、真実はヨーガの身体技法によって、誤りから分離される。この現象的な存在の束縛からの解放は、ニルヴァーナ(涅槃)と呼ばれる。

タントラ

タントラは「宣伝し、救護する」という語源に由来し、マントラ及びヤントラから構成されている。タントラによれば、私たちの存在は大宇宙の小宇宙であると考えられている。そしてタントラは私たち小宇宙の存在を解明して、本源である非顯現な大宇宙へと合一させ、すべてのものの超越である完全な解放、無上の啓発を得させようとする。

私たちの小宇宙(心靈体)は次のように組み立てられていると考えられている。

<生命の気(プラーナ)>……私たちの意識原理である識る心は、肉体化される時、5つの鞘(コシア)の中に包まれる。それらは(1)心靈の鞘、(2)生命の鞘、(3)普通の人間の意識の鞘、(4)潛在意識の鞘、(5)存在の本性の凡てを超越する至福に満ちた意識の鞘である。

生命の鞘は10の生命息(ヴァーユ。プラーナの運動を起こさせる力)に分けられた生命の気(プラーナ)に属している。プラーナのネガの形でつくられたこれらのヴァーユは、人間の体の操作を支配する。基本的なものに5つある。(1)プラーナ、靈感を支配する。(2)ウダーナ、上昇する生命の気(あるいは生命息)を支配する。(3)アバーナ、下方の生命の気を支配し、屁、大便、小便、精液を放出する。(4)サマーナ、ヴァーユの集合的な力として食物が消化され、血によって配給される体の火を燃やす。(5)ヴァーナ、新陳代謝の分割及び拡散を支配する。

<心靈神經、あるいは水路(ナーディー)>……人間の体には14の主要なナーディー(水路)と何千何百という小さなナーディーが走っている。ナーディーは支配者である生命息(ヴァーユ)の心靈力のための見えない水路である。14の主要なナーディーのうち、重要なものに3つある。中枢神經(スシュムナー・ナーディー)、左神經(イーダー・ナーディー)、そして右神經(ピンガラー・ナーディー)である。スシュムナー・ナーディーは、中枢の神經

であり、大宇宙の小宇宙としてみなされている人間の体のメルー山(宇宙の中核)である脊柱(ブラーマ・ダンダ)の空洞の中に位置している。左にイーダー・ナーディー、右にピンガラー・ナーディーが、2匹の蛇がぐるりととぐろを巻いたように巻きついている。

<心靈神經センター(チャクラ)>……スシュムナー・ナーディーは、人間の体の心靈力が通過するための最高の高速道を形づくっている。心靈力は、スシュムナー・ナーディーに沿って並んでいて互いに接合され、発電機のようなセンター(チャクラ)に集中されている。その中に、あらゆる心靈的な肉体の過程が根本的に従う生命の氣、あるいは生命流がたくわえられている。

これらのうち主要なものに6つある。最初のものは会陰に位置し、スシュムナー・ナーディーの根源の支持、ムラードハーラー・チャクラである。このムラードハーラー・チャクラの中に、女神クンダリニによって支配される極秘の生命の氣の噴水がある。その上に、生殖器の神經センターであるスヴァードヒシターナ・チャクラ、臍の神經センターであるマニ・プーラ・チャクラ、心臓の神經センターであるアナーハタ・チャクラ、喉の神經センターであるヴィシュドハ・チャクラがそれぞれに位置している。

ブッダの象徵である「第3の目」によって表わされるように、眉の間に位置している第6番目のアジナー・チャクラの中に、3つの主要な心靈神經(水路)であるスシュムナー・ナーディー、イーダー・ナーディー、ピンガラー・ナーディーと一緒にやってきて、分離する。最後に、人間の体の宇宙に向かって下方へと放射光を放出している体の太陽である心靈人間の原因地帯(脳)の中に、最高の、あるいは第7番目のチャクラであるサハスラーラ・パドマ・チャクラと呼ばれる千の花弁をつけた蓮華(チャクラ)がある。スシュムナー・ナーディーは、その出口であるブラフマの開き口(ブラフマ・ランドハラ)を持っている。意識原理は、死ぬ時一般にそこを通って体から逝去してゆく。

タントラの実修者の主要な目的は、女神クンダリニとして表わされたサーペント・パワー(蛇の力)と呼ばれるものを目覚めさせることである。それはスシュムナー・ナーディーの根源である脊柱の基底にあるムラードハーラー・チャクラの中にある。この絶大な神秘的な力は、蛇が眠っているように、とぐろを巻いてよこたわっている。一度サーペント・パワーが活動へと呼びさまされるや、それはマジック・チューブの中の水銀のように上ってゆき、脳のセンターの中の1000の花弁をつけたロータスに達するまで、1つ1つ心靈神經センター(チャクラ)に浸透するようにさせる。噴水のようなとさか状に噴出し、それは心靈体のあらゆる部分に養分を与える天の神のシャワーのように落ちてゆく。このようにして無上の精神的力で満たされるようになって、ヨーギは啓発(精髄的知恵)を経験するのである。

空なるものの愛

私たちは『バルドウ・トエ・ドル』に述べられた次の言葉から何を学ぶだろうか。

「ああ 善き人よ。聴くがよい。今汝は、眞の存在本性のクリヤー・ライトの発光を経験している。それを認識しなければならない。

ああ 善き人よ。本性が空、生来の空であり、何らかの特徴や色へと形づくられない汝の現在の知性は、存在の本性そのもの、妙善なる母である。

何も無いという空としてではなく、妨害されず、輝き、血沸き肉躍り、至福に満

ち、知性それ自身としてみなされる空である今の汝自身の知性は眞の意識、妙善なるブッダである。

本性が空であり何ものにも形づくられていない汝自身の意識と輝き至福に満ちた知性、これら2つのものは分けられない。それらの融合が完全な啓発であるダルマ・カーヤの状態である」

ここに明らかにされた「空の認識」は、私たち日本の佛教徒がいだいてきた無に帰着してゆくようなそれとは全く異なっているように思われる。「何も無いという空としてではなく、妨害されず、輝き、血沸き肉躍り、至福に満ち、知性それ自身としてみなされる空」であり、「眩しく輝くクリヤー・ライト」であるというのである。空のこの無上の恍惚と至福に満たされた状態を、私たちは他に見い出すことはできないであろう。

そしてここには、私自身であることの空性が何と鮮やかに示されていることだろうか。しかしそれは、私たちが理性によって神聖にして冒すべからずと考えてきた理性の命令への必死の抵抗、自我の至上権の断念、死の王によって滅多切りにされるような意識の象徴的な死を通過してこなければならないということを意味する。私たちは私たち自身の象徴的な死のかなたに、私たちの魂が眩しく輝くブッダ(仏)それ自身であり、ブッダ(仏)は私たちの魂なのであるということが実現される。このようにして、誕生で失った仮性が私たちの魂に復活される。それはさらに、私の魂でもブッダ(仏)でもない非顯現なダルマ・カーヤの精髄的な知恵・原初のクリヤー・ライト、空そのものの中に融け込んでゆくのである。ここに私たちは、世界のすべての神々や論理を超えて帰一してゆける非顯現な全一態があるのを見い出すことができるようと思われる。即ち空、すべての所説やすべての断定をこえた超越の状態である。私たちが「チョエニ・バルドゥ」の神々の形象の段階にいる限り、眞の存在の本性はまだ私たちの前に姿を現わしはしないのである。

この超越の状態は私たち自身の死の瞬間のバルドゥにおいて認識されるけれども、私たちは『バルドゥ・トエ・ドル』を支えるヨーガの中に、これらの秘密の扉を開くもう1つの実際的な、そして本質的な鍵を見い出すことができるだろう。ヨーガは人間探求の科学であり、目覚めたものの教えである佛教こそ、このヨーガの実修によって見開かれた法に他ならないのである。

佛教の開祖釈尊は、沙門(求道者)としての6年間の苦行の末に、ついに、灼熱の太陽に緑のそよぎを送る菩提樹のたもとに座をしめて瞑想すること49日にして、大いなる悟を開き、目覚めたもの(ブッダ)となった。これらの出来事についてはすべての仏伝が一致して明らかにしているところである。そしてこの『バルドゥ・トエ・ドル』経典が描き出しているバルドゥにおける魂の旅は、他ならぬ釈尊の49日間のヨーガ行でもある。かれ仏陀釈迦牟尼は、目覚めた意識をもって死に、49日間のバルドゥの魂の旅を経て、全く新しい意識生命を受けてこの世に再誕生してきたものと考えられる。

それ故にこの秘密經典『バルドゥ・トエ・ドル』は、実際的な死の瞬間ににおける精髄的な知恵の認識のための導きばかりでなく同時に、瞑想のバルドゥという象徴的な死の出来事の体験であるヨーガ行にいそしむ人々にとって、精髄的な知恵の認識に至る無上無比の導きの書なのもある。

私たちはここに明らかにされた目覚めたものの原点に立ち返ること、即ち1人1人がこのような瞑想の下に意識解放の洗礼を受け、精神性的な知恵を知覚体験して再生していく必要があるだろう。その時、この世界(今ここ)そのものが、非顯現な全一態である空(精神性的な知恵)の顯現として立ち現わされてくるのではなかろうか。そこにブッダの教えの真髓があるように思う。往くべき彼岸(涅槃)とは、『バルドウ・トエ・ドル』も言うように、絶対の今ここにある自覚(識)以外のどこにもないものだからである。